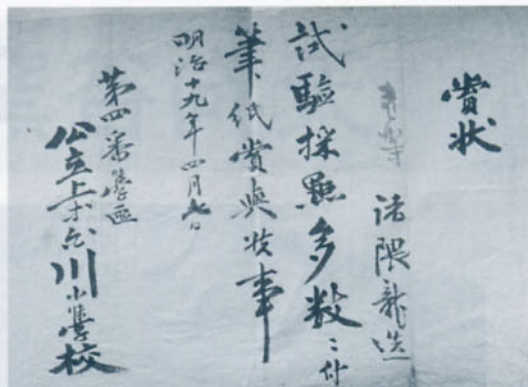




池辺三山
「国史大事典」
より転載



公立上等白川小学校から諸隈龍造さんへの賞状

池辺三山と有田上等小学校

～有田を訪れたジャーナリスト～

有田には江戸時代から多くの人々が訪れました。例えば佐賀藩主や長崎奉行の巡見であったり、一般には観光（物見遊山）や、焼き物の技法を学ぼうという目的であったりとさまざまでした。もちろん、記録に残らない往来もあったことと思います。

明治になってその往来が自由になってからは、外国からも有田の焼き物づくりに興味をもった人々が訪れました。そのような中に、後に明治を代表するジャーナリストとなった池辺三山もいました。時は明治18年、当時佐賀県属（県の職員）として有田上等小学校の開校式に出席しています。

池辺三山、本名吉太郎。父は熊本藩士吉十郎、母世喜の長男として元治元年（1864）2月5日に生まれました。吉太郎13歳の時、父吉十郎が明治10年（1877）の西南戦争の際、熊本隊を率いて西郷隆盛軍に参加し、敗戦後に処刑されるという悲惨な経験をしています。明治14年1月、父吉十郎の友人・鎌田景弼（^{かまたなかげすけ}酔右）の援助で上京し、中村敬字（正直）の私塾・同人社に入りました。ちなみにこの同人社は明治6年に設立した私塾で、明治初期において福沢諭吉の慶応義塾、近藤真琴の攻玉社とともに三大義塾と称され、生徒数は300名を越えていました。佐賀からも多久出身の西英太郎（政治家・実業家）が同塾で学んでいます。

三山はその後慶応義塾に転じ、しばらくして学資不足と病気のため「学未だ全く成らずして」東京を去り、佐賀県令の地位についていた鎌田景弼の招きで、佐賀県学務課に勤めることとなりました。三山が有田を訪れたのはこの時期です。当時三山は二十歳で、前述の2月7日の有田上等小学校開校式に出席しています。この小学校は上幸平にあった有田中学校の跡地に開校しました。「明治行政資料・町村立小学校設置認可簿」によると明治17年12月に新村と有田皿山との共同で、中等科と高等科の両科を教授する「西松浦郡新村・有田学区村立小学校」をつくる話がまとまり、設置伺いを佐賀県に提出しています。資料によっては「上等有田小学校」とか、「上等有田新村連合学区公立有田小学校」とか呼んでいますが、いずれにせよ内山・外山共同の画期的な小学校であったことは確かです。

後年、朝日新聞社に入社し「新聞記事は明快にして達意」という持論を浸透させ、二葉亭四迷や夏目漱石らの入社を促し、小説連載を始めた三山の若き日の姿が有田にありました。開校式には当時の有田を率いていたリーダー達も揃っていたことでしょう。そこではどんな会話が交わされていたのか、興味のあるところですが、残念ながら三山が有田に関して述べたものは目にすることができません。（尾崎）



池辺三山については「池辺三山～ジャーナリストの誕生」池辺一郎・富永健一著、有田の小学校については「有田町史 政治社会編Ⅱ、通史編」にあります。また、鎌田景弼については「佐賀県大百科辞典」や「佐賀幕末明治500人」にあります。

なお、有田中学校及び有田上等小学校があった場所は、上幸平と大樽の境界付近で、通称「たかみ」、元町営住宅が建っていた一帯だといわれています。

皿 山 春

季刊

No. 49

有田町歴史民俗資料館・館報

天狗谷窯跡の発掘調査



写真1 天狗谷窯跡の全景

■ 1. 有田にとっての天狗谷窯

現在、天狗谷窯跡（写真1）の環境整備事業が進められています。天狗谷窯は有田焼の陶祖とされる李参平ゆかりの窯として知られていますが、有田焼の歴史の中でどのような位置づけにある窯なのでしょうか。

「今之泉山江陶器土見当り、第一水木宜哉、

最初は白川天狗谷ニ釜を立、」（「金ヶ江家文書」）

江戸後期に李参平の子孫が先祖の功績を記した古文書の一部です。泉山磁石場を発見後、水と木に恵まれた白川天狗谷に最初に窯を築いたという内容が記されています。また、次のような一文も残っています。

「皿山金ヶ江三兵衛高麗方罷越候書立

見

一、某事、高麗方罷渡、数年長門守様江波召仕、

今年三十八年之間、丙辰之年方有田皿山之様ニ罷移申候。」（「多久家有之候御書物写」）

つまり、金ヶ江三兵衛（李参平）は「丙辰之年」に有田皿山に移り住んで38年になるというものです。この文の日付は承応2年（1653）であることから有田皿山に移り住んだという丙辰之年とは元和2年（1616）になります。

この有田皿山に移り住んだという元和2年と泉山磁石場の発見、天狗谷窯の開窯を結びつけて、日本の磁器生産は元和2年に天狗谷窯で始められたと考えられたのです。

しかし、李参平は有田に移り住んでしばらくは乱れ橋（今の三代橋）近くに住んでいたといいますが、その後の調査や研究により天狗谷窯＝磁器発祥の窯という考えは今では否定されています。現在では有田の西部地区の唐津系陶器を焼いていた窯場（天神森窯や小溝上窯など）で磁器の生産が最初に始められ、その後

に天狗谷窯などの磁器専門の窯が築かれたと考えられています。磁器专业化し、磁器生産を産業化することによって今日の有田があるわけです。天狗谷窯はいわば今日まで続く有田焼産業の基礎となった窯と位置づけられるでしょう。それは磁器発祥の窯に勝るとも劣らない歴史的意義をもった窯であると言えます。

そして、金ヶ江家文書の内容を改めて読んでみますと、磁器を初めて焼いたという技術的な功績ではなく、泉山磁石場を発見して天狗谷窯を築いたことによって有田皿山の繁栄の基礎を固めた功績を記していることがわかります。李参平の子孫が先祖の功績として、李参平が同じく関わったとされる小溝の窯場の名をあげずに泉山磁石場と天狗谷窯の名をあげていることから当時も同じような意義を天狗谷窯に認めていたのでしょう。

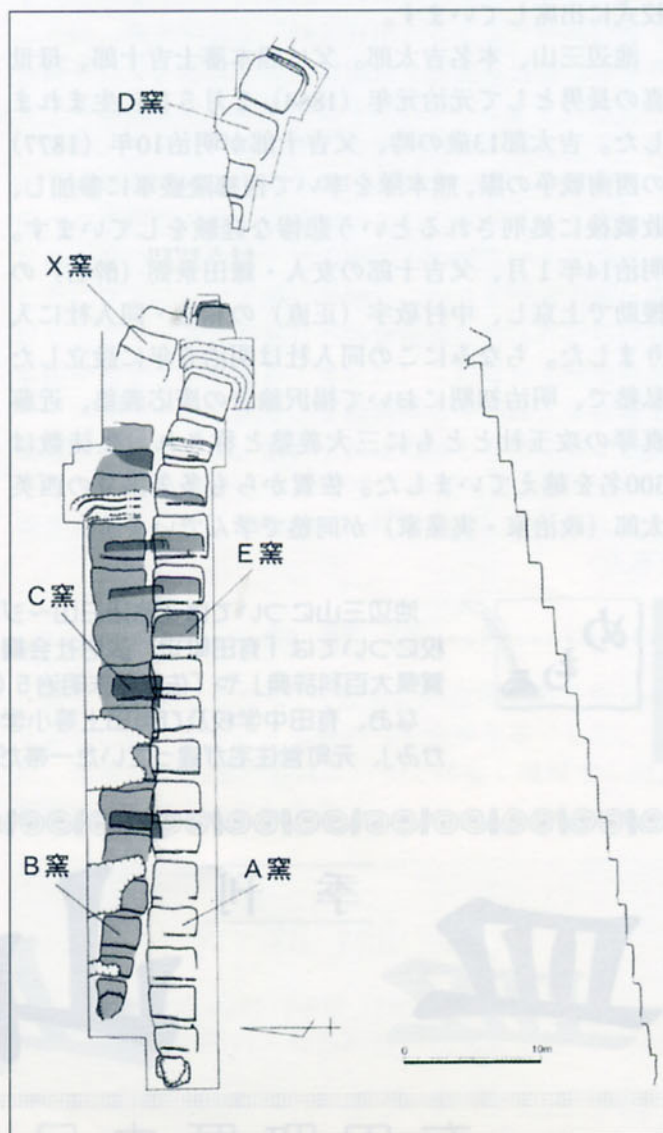


図1 天狗谷窯跡全体図（昭和40～45年調査）

■ 2. 昭和40年～45年の発掘調査

古文書などに記載があることから白川の天狗谷に窯跡があることは早くから知られていましたが、昭和30年代当時、付近は畑地、雑木林となっており、往時のおもかげはありませんでした。また、盗掘による被害や自然崩壊も激しく、現状以上の破壊を防ぐために天狗谷古窯址保護保存の嘆願書が有田町長、有田町議会議長宛に出されました。これを契機に全容解明と保存を目的とした発掘調査を行うことが決まりました。

そして、いよいよ天狗谷窯の発掘調査が故三上次男先生、倉田芳郎先生を中心とした調査団によって、昭和40年（1965）に始められました。有田の窯跡の初めての本格的な考古学的発掘調査です。そして、昭和45年（1970）までの6次にわたる調査の結果、E窯、A窯、D窯、B窯、C窯と名付けられた5基あるいはそれ以上の登り窯が存在したと推定されました（図1）。その後、この発掘調査の成果をもとに天狗谷窯跡は国史跡に指定されました。



写真2 天狗谷窯X窯出土状況（平成12年調査）

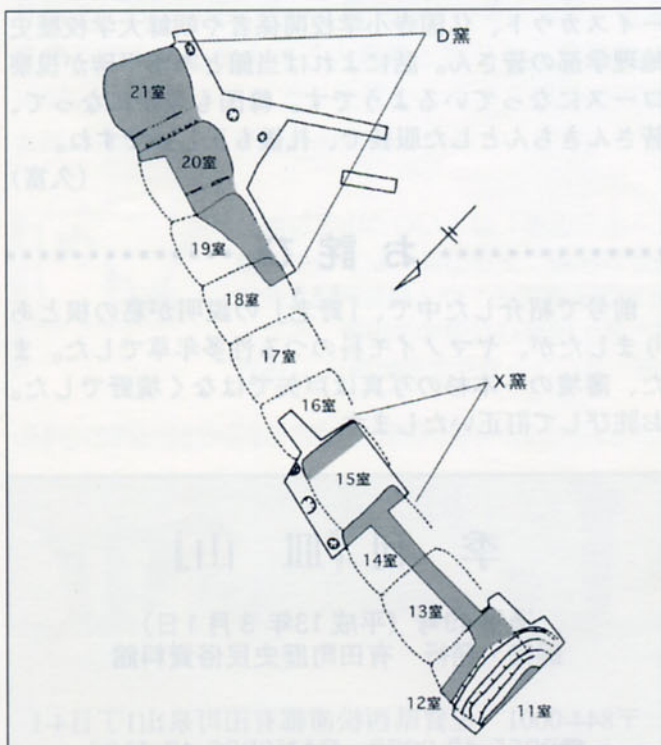


図2 天狗谷窯B窯上半部実測図（平成12年調査）

■ 3. 平成11年～12年の発掘調査

近年、天狗谷窯跡の本格的な整備計画がスタートし、基本計画や基本設計に基づいた発掘調査を一昨年から行っています。昭和40年代の発掘調査は窯体中心の調査で物原は未調査のままでした。そのため、平成11年の調査の目的は物原（失敗品の捨て場）の堆積状況とA窯の胴木間（最初の燃焼室）の確認などでした。その結果、物原の調査ではB窯、C窯、D窯のものと思われる物原の確認はできましたが、より古いE窯、A窯の物原は確認できませんでした。E窯やA窯の窯体に近い部分しか調査できなかったため、E窯やA窯については窯の横の作業段を確認したのみでした。



写真3 天狗谷窯物原堆積状況（平成12年調査）

続いて平成12年には物原部分の調査をさらに拡大するとともに復元予定のB窯の窯尻部分（登り窯の最後部）とX窯、D窯の調査を行いました。

その結果、物原についてはA窯、E窯の物原まで確認することができました。最も古い製品で1630年代頃のものでした。ただし、E窯の物原は堆積も薄く、今回の調査区よりもさらに離れた箇所に厚く堆積している可能性があります。また、窯の作業段の構築面の上で大きな石が発見されました（写真3）。どうやら窯の上方の崖から崩落してきたものようです。昭和40年代の発掘調査ではA窯の焼成室からも発見されています。崖に近いE窯やA窯の廃窯の一因となった可能性が考えられます。

そして、X窯、D窯については、どうも独立した窯ではなさそうです（写真2）。調査以前よりある程度予測はしていましたが、X窯の一部とD窯はB窯につながりました（図2）。そして、X窯の一部はC窯につながりました。5基あるいはそれ以上あると考えられていた天狗谷窯跡ですが、実際は古い順にE窯、A窯、B窯、C窯の4基であったことがわかりました。

最後になりましたが、天狗谷窯の環境整備は平成20年まで続く予定です。周辺の住民の方々にはいろいろ御迷惑をおかけいたしますが、どうか御理解と御協力をたまわりますようお願い申し上げます。（野上建紀）

人物往来

1月25日にアメリカ・シアトル在住の芸術家、グロリア・ボーンステインさんが来館されました。来日の目的は、来年3月にシアトル美術館で開催予定の作品作りのためです。これまでも各地で作品を作り続けていて、女性の目を見た社会を芸術で紹介する数少ない芸術家です。今回有田を選んだ理由は、シアトル美術館に所蔵されている多くの有田焼のコレクションを見て、焼き物の美しさに惹かれ、これらを作った人々に思いを馳せたとのこと。そして、姪で諫早在住の中古賀葉子さんを通して当館発行の「おんなの有田皿山さんば史」を読み、女性と焼き物をテーマにできないものかと構想を立てているそうです。「さんば史」が海の向こうでも活用されていることを嬉しく思います。

また、2月7日にはフィラデルフィア美術館員の木下京子さんが来館。明治9年同所で開催された万国博覧会に出品された有田焼が、同館に数多く所蔵されており、来年開館125周年を記念してそれらの資料を展覧するための調査に来日されました。未だ一般には公開されていない、明治の先人たちの力作が明らかになるということで、乞ご期待！



泉山石場を見学中のグロリア・ボーンステインさん(左)

お知らせ

・「写真で残す ふるさと有田」作品募集

昨年4月に発表した「写真で残す ふるさと有田」の作品募集は、今年2月末日で締め切りました。これは移り変わる「ふるさと」の自然、暮らし、なりわい、祭りなどの写真を残そうと、町民の皆さんに呼びかけたものです。入賞者発表は3月31日です。まだ提出していない方は、町内写真店を通じて提出してください。

・眠っている「お宝」はありませんか

早いもので、世界焔博が平成8年に開催されてより5年になろうとしています。町内14の美術館施設の作品と、町内居住の皆さんの自慢のコレクションを「有田の名宝」展として、町内外の皆さんに披露するのもいいのではないかと考えているところです。これぞというお宝をお持ちの方は、当館までご連絡ください。 電話43-2678



昨年11月13日より12月28日まで開催された「川浪養治～写生の心」展は、1415名（1日平均31人）にご覧いただきました。この内80%が有田在住の方です。このように有田の皆さんがコミ

ュニティーバスを利用して泉山の歴史民俗資料館にお越しいただいた、こんなに嬉しいことはありません。川浪先生は、ご存じのように有田で生まれ、川合玉堂の門下生になり、有田工校教師として、また東有田中学校長として後進の指導に当たられ、穏やかで実に立派な方でした。

昨年、有田工高開校百周年であったことから、記念式典のあと、川浪先生の教え子の方が次々に見えたほか、窯業に従事する方の来館が目立ちました。そこには本物指向といえますか、良いやきものを作ろうという真剣な眼差しがありました。これから先人の良い作品を紹介するのも当館の役割だと自覚した次第です。

館に備え付けの芳名録によれば、会期中に334名が署名をされています。有田町140人、西有田町20人、韓国の大学関係者17名、このほか北海道・山形・仙台・群馬・千葉・東京・横浜・静岡・大阪・神戸・岡山・広島・山口それに九州各地の方が記入されています。このように全国各地から有田に見えているということは、風光明媚な「観光有田」として、いろいろな企画を立て、町民皆さんで温かく迎える体制づくりが今年の課題ではないかと思う次第であります。

また、1月には韓国からの来館者が続きました。韓国では1月の中旬まで冬休みだそうです。1月中の当館への来館者の半分は韓国からのお客さまでした。1月の大雪の日に突然、釜山市の小中学生80名が見えました。フェリーで下関に上陸し、バス2台で当館へ直行し、ガイドさんが銀行へ外貨両替に行ったために日本語が通せず少々あわてました。このほか光州市のボーイスカウト、仏国寺小学校関係者や朝鮮大学校歴史地理学部の皆さん。話によれば当館と李參平碑が視察コースになっているようです。韓国も豊かになって、皆さんきちんとした服装で、礼儀も正しいですね。

(久富)

..... お詫び

前号で紹介した中で、「野老」の説明が葛の根とありましたが、ヤマノイモ科のつる性多年草でした。また、藩境の一本杉の写真は戸矢ではなく境野でした。お詫びして訂正いたします。

季刊『皿山』

通巻49号（平成13年3月1日）
編集・発行 有田町歴史民俗資料館

〒844-0001 佐賀県西松浦郡有田町泉山1丁目4-1
☎0955-43-2678 FAX0955-43-4185